

# 千利休の名言

【名言】

家は洩らぬほど、食事は飢えぬほどにてたる事なり。

【意味】

人間の欲望はきりが無い。

「ちようど良い」がわかれば、内面から豊かになれる。

## 【解説】

利休の茶法、教えを伝える江戸期の代表的な茶書『南方録』なんぽうろく。その冒頭の言葉です。利休の弟子、南坊宗啓なんぽうそうけい(南方録筆録者)が、ある日師利休に問いました。

「本式である書院・台子の茶よりも、粗末な侘び小座敷の茶に本当の茶の心がある、とおっしゃいます。それはどうしてでしょうか」

利休は、立派な家座敷・豪華な食事は俗世の欲、「雨漏りのしない程度の家、飢えない程度の食べ物」で人は充分こと足りる。それが仏の教えであり、茶の湯の本義もそこにある、と答えま

す。

無為自然を説く、老子の「知足」という考え方は、日本文化に大きな影響を与えました。「足るを知る」。つまり、自分の身の丈を知り、すべてにおいて「ちょうど良い」充実感を知りなさい、ということ。人間の欲望は果てしなく、求めれば求めるほど不足を感じ、ますます不幸になつていくもの。持ち物が少なくなれば、心配もなくなり、生活はシンプルになり、何事にも一所懸命になれる。そうして、そこに人の本当の幸せがあるのです。

「足るを知る」ことができれば、次に自分のできることを精進する。人の手を借りずに、亭主利休自ら客のために水を運び、薪を切り、湯を沸かし茶を点てる。その真心のこもったもてなし、一杯の茶を分かち合うことで、主客共に心のそこからぼかぼかと暖かくなり、本当の豊かさを味わうのです。目を驚かす豪壮な邸宅も、ぜいを尽くした山海の珍味も必要ない。身の丈にぴったりに合った幸せこそ、すべての人を真実豊かにしてくれるのです。

老子『老子道德経 上篇』三三 二知足

「知足者富 強行者有志 不失其所者久 死而不亡者寿」より。

真実の満足を知り、おのれの為すべきことに努力する者は、亡びることなく長寿を保つ、の意。

### 【出典】

宗易がある時、集雲庵しゅううんあんで茶の湯を語り、茶の湯の根本は白子の茶にあるものだが、心のたどり着くところでは草の小座敷の茶に勝るものではない、と常々あったので、どのような訳かたらずねてみた。宗易は、

「小座敷の茶の湯は、第一に仏法をもって修行し、道を得ることである。家屋の立派さ、食事の珍味を楽しむことは俗世の習い。家は雨漏りせぬほど、食は飢えぬほどで足りるものである。これこそ仏の教え、茶の湯の本意である。水を運び、薪をとり、湯を沸かして茶を点てる。これを仏に供え、人にもほどこし、われも飲む。花を立て、香をたく。皆々仏祖の修行をなぞらえ学ぶことである。なおくわしくは、貴僧の悟りにて見つけるがよい」と答えた。

『南方録 現代語全文完訳』 2006年 能文社

【名言】

いちごいちえ  
一期一会

【意味】

「もう二度と会えないんだ」と思って、いつも人と会おう。



## 【解説】

千利休の高弟、山上宗二やまのしんせうじが伝えた『山上宗二記』にある名言です。

「一生に一度きりのチャンス」。一期一会の言葉の意味を問うと、ほとんどの人からこのような答えが返ってくるはずですが、しかし、どのような場面で用いるのかと聞くと、意見はわかれるようです。ちなみに次の二つのケース。あなたは、どちらが「一期一会」の正しい使い方だと思いますか。

1. 今日、有名人のOBが同窓会に来るらしい。一期一会のチャンスだ。
2. 今日の練習は先週と同じ顔ぶれだ。でも、一期一会でのぞもう。

本来の意味でいえば、2. 今日の練習は先週と同じ顔ぶれ……がより正しい使い方となります。「一度きりの出会い」ととらえるならば、1. も正解に思えます。でも実は、「人と人の出会いに、同じ組み合わせはない。決して同じ出会いはない」のです。

哲学的になりますが、この世に変化しないものはない。時間とともに刻一刻と人も、すべてのも

のも変化します。一見、固定、形式化され、不変のように見える能と茶の最大の共通概念が、この「一期一会」であるとされる理由がこれです。能の例でいえば、たとえ同じ演目・同じ演者・同じ観客であっても、気候・時間・場・個人のコンディションなどにより、そこには著しく異なつた舞台が繰り広げられます。

茶も同様。同じ主客の顔ぶれであっても、昨日と今日、同じ茶になることはありえない。生涯に一度、今この瞬間は二度とない。ましてや、利休の時代は戦乱のただなか。今、目の前で茶を喫する客人も、明日は戦陣。ふたたび相見える保証はどこにもないのです。二度とは来ない、どんな大名物よりも貴重な、輝くこの一瞬を、ともにもてたことに感謝し、静かに一椀をまわしあう。今生の別れの客人をぞんざいに遇する人などいるでしょうか。

「一期一会」は、毎日会う人をこそ、大切にせよ、と教えてくれます。

## 【出典】

客の振る舞いこそ、一座いちざ建立こんりゅうの要である。細部にわたって秘伝の多いもの。初心者のため、

その意義を紹鷗は語り伝えた。ただし、当時このように教えることを宗易は嫌ったもの。それで、夜話のついでにぼつりぼつりと語ったのである。一番大事なことは、朝会夜会に寄り集まった間合いであれ、道具披き、口切の茶会はいうにおよばず、普段の茶会であっても、露地に入り、露地より出づるまで、一期に一度の会と思ひ、亭主を畏敬いけいすることである。世間話は無用。夢庵むあんの狂歌、

わが仏 隣の宝髻たひり 天下の軍い 人の善悪

この歌にて心得るべきである。もつばら茶の湯の事、数寄談義を語るべし。

一 茶の点前は無言でなす。次に亭主ぶりとは、心の底より客人を敬うこと。貴人で茶の湯上手はいうにおよばず、平凡な参客をも、心の底で名人のごとく思ふべし。かように客となり亭主となつて招き合つことが第一である。道具披きには、客一人か。

『山上宗二記 現代語全文完訳』 2006年 能文社

千利休由緒書

現代語訳

## 『千利休由緒書』

慶安四年卯四月

庵有御坊御係也

承応二年、葵巳みずのとみの年の春、権現様（徳川家康）の系譜編纂が、紀州藩儒臣李一陽（梅溪ばいけい）と同儒臣宇佐美彦四郎（左助）の二名に命ぜられた。中でも千利休宗易の事跡が必要とのことゆえ、その経歴を江岑宗左逢源齋へ下問した。以下はその折、宗左の返答を取りまとめた覚書である。

利休の祖先は代々足利將軍家に同朋衆として仕えたという。祖先は姓を「田中氏」と名乗り、利休の祖父は田中千阿弥せんあみと名乗った（初めは専阿弥と号していた）。東山公方慈照じしょう院義政公の同朋衆である。

応仁元年五月、山名持豊入道宗全と細川右京大夫勝元が反目しあい、それがもとで天下の大乱を招いてしまった。この時、公方の御所内に山名方と内通し、將軍へ謀反を企てる近習十二名がいると、細川勝元が言上。これにより、同年八月二十三日、その近習どもは御所を立ち退くこと

となつた。一行は、一色式部少輔、佐々木右京大夫、上野刑部宮下野守、結城下野守、伊勢備中守、荒尾、三上、斎藤等十二名で、利休の祖父田中千阿弥の名もその中に含まれたといふ。

千阿弥は堺へ立ち退き、名字を変えて潜伏した。文明五年、山名宗全、細川勝元がともに病没。その年、東山公方義政公は隠居し、その子義尚公が將軍家の家督を継ぐ。この方が常徳院殿じょうとくいんである。田中千阿弥は帰洛を果たし、義尚公に仕えることとなつた。

長享元年、公方常徳院義尚公が近江の陣中にて亡くなられる。田中千阿弥は出家し、泉州堺へ隠居。千阿弥の子、与兵衛は田中姓を改め、父の千を姓として千与兵衛と名乗ることとなる。そして堺今市町で商家を営んだ。その子、与四郎も今市町で父の商売を継いだ。茶道を好むようになり、後には武野紹鷗に弟子入りし、剃髪して千宗易と名乗つた。

(質問)

宗易の師、紹鷗とは何者か。

宗左の返答は以下であつた。紹鷗の祖父は、元若狭の国の国主、武田大膳大夫元信。その二男

伊豆守仲清は応仁の乱にて討ち死にした。その子、五郎信久は幼少にて牢人となり、泉州へ落ち延びたという。信久の子、武田因幡守仲村が紹鷗である。

永正八年、船岡山合戦の際、細川右馬頭政賢に従い戦功をあげるが、政賢が討ち死にを遂げ落人となつてしまふ。再び堺へ戻り、武田姓を「武野」と改め、南ノ端に住居する。茶の湯は珠光・宗珠に習つた。後、京へ上り四条夷堂の隣に居を構える。「大黒庵紹鷗一閑」と号して茶道一流を聞いた。当時堺の津では、北向道陳きたむぎしうぢんがまた茶道一流の大祖であつたが、紹鷗と友であつたといふ。紹鷗は、弘治元年十一月、京都にて病没した。

(質問)

利休は、いつ頃信長公に召しだされたのか。

以下、宗左の返答。当時堺では、地元の茶人、今井宗久(菜屋)、津田宗及(天王寺屋)二名の茶名が高かつたゆえ、信長公より各々おの三千石が下されていた。宗久は利休と親友であつたため(利休は紹鷗の弟子。宗久は紹鷗の婿むこであつたため親友となつた)、利休を信長公に推薦する。利休は安土城に召され、茶を差し上げたが、ことのほかすぐれた点前であつたゆえ、即座に三千石を

もつて召しだされることとなる。その後、安土へ詰め、毎度の茶の湯と茶堂さどうを命ぜられ、並ぶもののない出世を遂げたのである。

天正六年信長公は上洛。そのまま堺へ赴き、宗久、宗及、道叱宅みちしつにて茶会を開かれたが、その折、利休宅へも立ち寄られ茶を召し上がったという。信長公が亡くなられた後は、秀吉公に召し出され、引き続き天下の茶堂としてご奉公することとなる。

天正十二年春、秀吉公と家康様の間で合戦となった。秀吉公は不利であったため、自ら家康様の妹婿となつて和談をすすめた。にもかかわらず家康様は上洛しようとなされぬゆえ、大政所様を岡崎へ人質として差し出されたのである。

これにより、ようやく家康様は上洛。新町通三条猪熊の南、中島清延宅なかじませいえんに到着された。これを聞いた秀吉公は早馬にて一行の旅宿、茶屋四郎次郎しやくしやく（訳者注 中島清延のこと）屋敷へ駆けつける。ここに家康様との対面がなつたのである。この時、利休は棗の茶入を襟にかけ、秀吉公につき従う。家康様へ、茶弁当ちやべんとうにて点前し、茶を一服差し上げた。秀吉公が、

「徳川殿。この坊主を知っておられるか」と話しかけられた。家康様は、



「いずれかで見かけたような」

との返答。秀吉公、

「この者は千宗易と申して、今の天下の名人です」

家康様、

「なるほど。安土城で度々見かけたゆえ見覚えていました」

と仰られた。秀吉公は、

「昨年、閏八月うすいづみより聚楽じゅらく第二工事を始めました。残念ながらもまだ完成しておりませんので、大坂城にて貴殿を歓迎いたしたい。私は明日大坂へ参りますので、家康殿もぜひ一緒に」

と誘い、二人で大坂へ出向いたのである。

さつそく大坂城天守にて利休を亭主として茶会が開かれた。秀吉公も客となって、家康様、織田常真じょうしん（信雄のぶかつ）様同座にて、利休が茶を点てたという。その場で秀吉公は白雲はくうんの大壺おおいと不動国行ふどうくにゆきの太刀を引き出物として家康様に献じる。このことがあってより、家康様の御前へ利休は召されるようになり、ねんごろな間柄となったのである。